

other things else. Also, the adaptation of this "imported" knowledge, which is not much different from other "foreign goods," lacks solid harmonized continuity and strong internal criticism. This, and some more other factors, seem to be unable to help create originality, development and real value for the Thai study scholarship in modern Thailand, except only a few.

シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞報告要旨

趣旨説明—————玉置 泰明

本テーマの背景は「国際先住民年」である。しかし東南アジアにおける「先住民」はアメリカ大陸や豪大陸の場合のように自明の存在ではない。現在の東南アジア各国でも、誰を先住民とするかについて明確な合意（政府のだけではなく、研究者の間でも）が存在するとは言いがたい。さらに、歴史的に見れば東南アジアの各民族は、ある時点では移住民として、またべつの時点では先住民として存在してきたと言えるだろう。実体あるいは概念としての特定の「民族」自体が、諸集団の移住や離合集散の繰り返しの中で形成されてきたと言う方がいいかも知れない。それゆえ我々が「東南アジア史における先住民」と言う場合、「国際先住民年」が対象とするような現代的意味での「先住民」だけではなく、歴史上の特定の時点での「先住民」をも対象とすべきであろう。様々な地域、様々な時点での先住民—移住民関係こそが、東南アジア史のダイナミズムを作ってきたという言い方も可能であろう。

例えばフィリピンの場合、スペイン人が到来した時点での「インディオ」すなわちすべての土着民族を「先住民」と考えることができる。ずっと遡って、先マレー系民族（ネグリート）が住んでいた群島にマレー系諸民族がやってきた時の関係も、先住民と移住民という図式でとらえることが可能である。それは諸集団が群島の各地に移動して定着していく過程の中でも繰り返しおこったことであり、マレー系諸民族同士の関係についても言える、下っては、キリスト教徒が南部フィリピンに移住した際の「先住」のムスリム諸民族との関係も見落とせない。

また、「先住民」は「先住少数民族」のみならず「先住多数民族」をもふくむ。東南アジア史ではとくに、華僑・華人と先住諸民族の関係が重要なことは言うまでもない。

こうした様々なレベルでの先住民—移住民関係を「共生と摩擦」という視点からとりあげることによって、東南アジア史の新しい側面に光を当てることができれば幸いである。

ヨーロッパ人とインディアス—————生田 滋

コロンブスに始まるヨーロッパ人のインディアス、すなわち新大陸進出は、厳しい、

あるいは荒廃した生態系のなかで生活していたかれらが発展させてきた当時のヨーロッパ文明そのもの持っているさまざまな要素がはばかることなく発揮された行為であった。とくにキリスト教思想が重要な役割を果たした。コロンブスの行為そのものも、当時の彼の思想的立場に即して考えると、「地上の楽園」すなわち「エデンの園」に到達するためであったし、また彼に見られる黄金へのあくなき欲求も実は聖地エルサレムをイスラム教徒の手から奪還するための軍資金を調達するためであった。「異教徒」の国家を征服し、文化を徹底的に破壊し、そこにキリスト教の信仰を移植し、キリスト教帝国スペインの支配権を確立することは当然のこととされた。この後さかに行われたキリスト教の布教活動も、その本来の目的は、近づきつつある最後の審判の日に「未信者」がそのために地獄に墮ちることからかれらを救うためであった。こうしたキリスト教的な発想はヨーロッパ人の世界各地への進出の強烈な動機となっている。これはつまり当時イスラム世界の圧迫を受けていたヨーロッパ世界の絶望と危機感が裏返しの形で強烈に表現されたことにほかならない。

もちろんヨーロッパ人の新大陸進出は現地の住民、すなわちインディオスにとって悲劇的な衝撃を与えた。とくに伝染病の蔓延はかれらの人口を激減させ、かれらの社会を崩壊に導いた場合が多い。しかし最近の研究によって明らかにされつつあるように、新大陸の各地に住むインディオス、とくに中南米の高原地帯で高度の農業文明を築いていたインカ、アステカ帝国の住民はよくその衝撃に耐え、それを吸収し、かれらの社会と文化が崩壊することを防いだ。こうした観点をさらに推し進め、ヨーロッパ人の新大陸進出の実態をさらに客観的に把握する必要がある。

マレーシアにおける先住民概念——富沢 寿男

国際先住民年に連動して学会やマスメディア、市民運動において世界の先住民問題にふれる議論が近年高まっているにもかかわらず、民族概念としての先住民を議論の出発点に据えたものは意外なほど少ない。当該地域の人々が認識する先住民概念の外延を吟味することは、その人々の歴史認識とこれに規定される歴史自体の動的過程を把握する上でも有力な着眼点となると思われるにもかかわらずである。

現代マレーシアの先住民概念として半島部ではオラン・アスリ（「先住民」）が挙げられる。それは公式の分類では、より古い先住民であるネグリトから、より新しいセノイを経て、もっとも新しいプロト・マレーまでを含む。一方、Benjamin (1985)はこのプロト・マレーに対応する先住マレー（ムラユ・アスリ）とイスラーム化したマレー（ムラユ）との連続性を強調し、セマン（ネグリト）、セノイ、広義のマレーを一括して「近年の土着文化」（recent indigenous cultures）としている。彼自身のこの学術的立場からの主張は、強い政治性が指摘されるブミプトラ（「土地の子」）概念と認識上は結果として符合する。ブミプトラは周知のとおり、きわめて近年の来住者である華人やインド人等を排除する概念であり、オラン・アスリはブミプトラの中のマレー・ムスリムの残余概念の性格が強い。ところで現在のマレーシアの国